

よって*C. albicans*の菌糸体が誘導されるか検討した。

(方法) 成人4名の唾液をMS培地に塗抹培養して最も大形の集落について菌種の同定を行った。検討菌株は分離菌の9菌株および*S. salivarius* ATCC 7073を用いた。これら菌株の培養菌体を加熱して死菌とし凍結乾燥を行った。*S. salivarius* ATCC 7073の一部の集菌菌体は加熱後その菌体と上清に分けて検討した。菌糸形成を観察する*C. albicans* A207はサブロー平板培地で培養後菌液を調整した。96穴プレートウエル内に加える培地はN-aceyl-D-glucosamine (GlcNAc) を含有する合成培地あるいはGlcNAcを含まない合成培地および上記各菌液を加えてウエル内総量を150 μ lにした。培養後プレートを遠沈し上清を除去してからウエルに10%ホルマリンの150 μ lを加えた。観察はウエルを顕微鏡下に置き底の菌糸体数や壁周囲の菌糸体の付着状況を撮影後、決めたインデックスに基づきその付着程度を示した。

(結果および考察) 培地上の最も大きい集落の菌種はいずれも*S. salivarius*グループに属する*Streptococcus vestibularis*であった。本菌種との共存によって誘導された*C. albicans*菌糸体はウエル内壁に強く付着し量的にも顕著であった。この結果によって*S. vestibularis*は*S. salivarius*と同様に*C. albicans*の菌糸体形成誘導能を有することが明らかになった。

14) 本学に導入されたX線CTの利用状況について

○熊澤 友子, 島田 敏尚, 鈴木 陽典, 高橋 和裕
(奥羽大・歯・歯放診)

今回我々は、2001年10月から2002年9月までの12ヶ月間に、奥羽大学歯学部附属病院放射線科でX線CT撮影を施行した、162症例について種々の検討を行ったので報告した。

(結果および考察) 1) 年齢、性別では、男性86例、女性76例、年齢は4歳から92歳までで、平均36歳だった。男女とも20歳代が一番多く36例、次いで30代40代50歳代は同程度で約24例だった。2) 各年代ごとの主な疾患では、20歳までは過剰菌や含菌性嚢胞の精査が主に行われており、20・30歳

代は第三大白菌、顎骨嚢胞の精査が多く、蜂巣炎と上顎洞疾患は同程度行われ、40・50歳代になると術後性上顎嚢胞の割合が高くなっていった。60歳代以上では骨髄炎とインプラントの精査が主に行われていた。3) X線CT撮影依頼の診療科では、口腔外科系疾患の撮影依頼は83%だった。小児歯科系疾患が8%、他病院からの委託が4%、矯正歯科系疾患3%、当院にて実施予定のインプラントは2%が撮影されていた。4) 撮影部位では、嚢胞・腫瘍の他、顎関節の形態確認や下顎骨骨髄炎などを含めた下顎骨内の病変が41%、埋伏歯・嚢胞などの上顎骨内の病変が23%、術後性上顎嚢胞を含めた上顎洞病変が17%、蜂巣炎や、頸部リンパ節転移、唾液腺疾患などの軟組織の病変が15%、上下顎にわたるインプラントや多発性含菌性嚢胞など上下顎撮影は4%だった。5) 疾患別では、嚢胞や骨内・軟組織の腫瘍が全体の38%を占めていた。埋伏歯の精査と、上顎洞炎・蜂巣炎などの炎症性疾患はそれぞれ22%で、インプラントや移植の症例は6%、骨折・オトガイ神経麻痺などは12%だった。6) X線CT撮影後に処理した画像と疾患別では、水平断・矢状断など単純画像のみが31%、3Dまたはデンタル3D画像を併用した撮影が69%だった。当院のX線CT撮影装置である東芝のAsteionKGの管電流は30~200mAまで可能だが、当院では放射線被曝低減のため、100mA前後で撮影している。また、体軸分解能は0.5mmでスライス幅も0.5mmまで可能である。現在、当院のX線CT撮影装置は設置後1年経過したが、画像処理等に関してさらに症例を重ね、診療に有効な画像を作成したいと考えている。

15) AGFA口内法フィルムの臨床的評価

○島田 敏尚, 大坊 元二, 鈴木 陽典
熊澤 友子, 寺田 秀雄, 高橋 和裕
(奥羽大・歯・歯放診)

(目的) 今回、新製品で安価なAGFA社製口内法フィルムを使用する機会を得たので、本学附属病院放射線科で、従来から使用されているコダック・インサイトフィルムとの違いについて、基礎的実験をもとに、臨床的な評価の比較検討を行った。